

論文審査の結果の要旨

氏名 岡田大助

本論文は、親鸞の中心思想といわれる「三願転入」の構造を、『教行信証』のテキストに即して明らかにしようとする試みである。三願転入とは、『教行信証』「化身土」巻中で親鸞が自らの宗教体験の展開を語った文言（三願転入の文）の意想をいう。すなわち、『大無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の四十八願の内、諸善を兼ね修めることを説く第十九願の立場から、称名念仏を専修する第二十願の立場に移り入り、さらに、他力信心の第十八願へと転じ入った過程の全体を、一つの思想として捉えた用語である。

三願転入については、古くからさまざまな議論がなされてきたが、その主たるものはおおよそ以下のようなものである。(1) 親鸞自身の思想遍歴の中で、それぞれの回心の時期を特定しその宗教的自覚の形を明らかにしようとする議論、(2) 三願転入がどのような形で親鸞思想全体の中心骨格となっているかを論じたもの、(3) 三願転入の内的論理を、正像末の歴史観に照らし合わせつつ、宗教的精神の自覚構造として捉えようとするものなどである。それらに対して、本論文の特色は、三願転入の文を導き出した前提となっている多数の経典論釈の引用を精密に読み解き、引用間に内在する論理として三願転入の構造を明らかにしようとしたところにある。

論者はまず「化身土」巻中の第十九願、第二十願についての引用文を検討し、それぞれの願に従う人々にとって超越者たる阿弥陀仏がどのように望み見られ、その出会いがどのように成就した（あるいはしなかった）かを跡づけていく。その結果、十九願の説く諸善も、またそこから移り入った二十願の称名念仏も、行の主体が衆生である限り、絶対他たるどころの「真実」の因とはなり得ないことが示される。十九、二十願に従う人々がつきあたらざるをえないつまりは、行を実践し、信心を起す衆生の主体性そのものが、真実の浄土への根本的な障碍となっていることを証していることを論者は捉える。第十八願の立場への転入は、つまりきを突き詰め、真実との断絶を自覚するところに成立する。このつまりきと成就の「はざま」を、論者は、「信」巻のいわゆる至誠心釈・深心釈と「化身土」巻中の第十九願、第二十願についての引用文との内的呼応関係を手がかりに跡づけ、衆生が疑心を離れえないこと、すなわち、自らの心を真実になしえないことこそが、他力の信心を「獲得」することと相即しているものと結論づけている。

本論文は、これまで結論的な文言に偏してなされていた三願転入をめぐる議論を、三願転入の文を導き出した前提となる引用経典に立ち返って検討し直したものであり、親鸞の経典解釈の手法についてさまざまなことが確かめられている。また、三願転入を、経典の読みを貫く論理として整合的に把握した点は高く評価出来る。その一方で、信心を与える仏という、阿弥陀仏の超越者としての特色についての論究が不十分であること、また、宗教的精神の自覚の論理として転入の内的構造を辿る議論との対質がつかぬことなど、問題点がない訳ではない。しかしこれらは、今後の研究の深化にまつべき課題である。以上により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。